

ふるさとと原理主義 浪漫主義的歴史観

(特非) シビルNPO連携プラットフォーム 理事
(特非) 茨城の暮らしと景観を考える会代表 理事

三上 靖彦



地域と共にまちづくりを進めるにあたって、「地域の歴史」は多くの人にとって、郷土愛に繋がる好材料になり得るものだ。そこで、地域の人々が共有できる歴史を、「ふるさとと原理主義」という考え方のもと、まちづくりの原動力となる郷土愛、ふるさと意識を深める「浪漫主義的歴史観」を紹介する。

「ふるさとと原理主義」とは、自分のふるさとは素晴らしい、という基本的な理念や原理原則を厳格に守ろうとする立場や主義。その際、個性は究極の競争力であるとの認識のもと、これを最大限に活用することがポイントだ。

ところで、歴史とは非常に微妙なものだ。勝者の歴史と言う言葉があるように、歴史は立場によって解釈が様々である。過去の事実関係は動かしようがないが、個人的な背景や動機、想いは、本当のところは分かるはずがない。一方「時代考証」とは、事実関係や道具や衣装、風俗や作法などが、その時代のものとして適当であるか否か。しかし、否定する史料が存在しない限りは、何がどうであっても間違いとは言いきれない（NHKエンタープライズの見解）。

そこで「ふるさとと原理主義」に立った歴史解釈では、「浪漫主義」が大切だと考える。「だったらいいな・・・いやいや！ それでいいんだ！（嘘ではない範囲で地元びいき）」と言った歴史観、それを私は「浪漫主義的歴史観」あるいは「原理主義的歴史浪漫」と呼んでいる。いくつかの事象から、個人的な背景や動機、想いを想像、想定することは自由。否定する材料がなければ、間違いとは言えない。むしろ、浪漫を持って肯定的に解釈しよう。独自の解釈で、ふるさとに生まれ育ったことの誇りを伝えよう。

さて、全国の地方創生もこれからが本番であろうが、どうであろうか。官がいくら旗を振っても、民は動かず。郷土愛、ふるさとに対する誇りが不足しているような感じがする。一人ひとりふるさとが大好きでも、それを強烈に後押しするような「何か」が不足している。私自身は、その「何か」の大きなものの一つが「ふるさとと原理主義」であり「浪漫主義的歴史観」なのではないか、と思っている。

我がふるさと茨城県は、ブランド力調査でもイメージ調査で毎年全国最下位だ。それは当然のことだ。茨城人はふるさと茨城を自慢しない。良いことよりも悪いことばかり言う。自分たちがふるさとを褒めないで、誰が褒めるのか。ふるさとと原理主義に立って、もっと自画自賛、勝手に褒めて自慢するべきである。そして、それぞれの地域が、もっと自己満足的に地域を満喫することが大切だ。そうしたことの積み重ねによって、地方創生、まちづくりの原動力が地域の中で育まれてくるのであろう。